【優秀賞】

感謝の気持ちを言葉に

三春町立岩江中学校　三年　増子　奈希

私たちは、普段からたくさんの人に支えられて生きています。しかし、それをどれだけの人が意識し、支えてくれている人たちに感謝して生きていることでしょうか。

もしかしたら、支えてもらっていることをあまり意識できず、それが当たり前のように感じてしまうっていう人が多いかもしれません。自分一人の力でできることは限られています。多くの人の支えがあってこそ、それぞれの「今」があるのだから、常に感謝の気持ちを忘れないようにすることが大切だと思います。

私がそう思うようになったのは、部活動で他校のバスケ部と合同チームを組んだことがきっかけでした。

去年、先輩たちが引退したのち。私はバスケ部の部長になりましたが、部員は私を含め四人しかいませんでした。四人では試合に出られないので、他校と合同チームを組むことになりました。

それまで大会で顔を合わせたことはあっても。直接親しく話したことはなく、合同チームとしての初めての練習のときは、お互いによそよそしく、硬い雰囲気でした。「このチームでうまくやっていけるのか」と、でも心配になりましたが、合同練習の度に仲が良くなり、プレーがスムーズになり、試合でもどんどん勝つことができるようになりました。合同チームでの練習はとても楽しく、充実したものになりました。

四月になり、私は三年生になりました。中学最後の中体連大会が二ヶ月後に迫ったある日、顧問の先生から、最後の大会は合同チームではなく、別々に出場することになったと言われ、私はとてもびっくりしました。

最後の試合も合同チームとして出場し、勝つことができるだろうと私は勝手に思い込んでいたので、一緒に出られないと知り、とても残念でした。

大会に向け、校内の他の部からバスケ部に一人メンバーに入ってもらい、なんとか五人で練習を重ねたものの、最後の大会は勝利にはほど遠く残念な結果に終わりました。

三月まで合同チームとして試合ができていたことは決して当たり前のことではなかったんだということに改めて気づかされ、共に汗を流した他校の仲間に今までにないくらい、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

私は合同チームの仲間だった人達に、「合同チームで一緒に試合に出てくれてありがとう」と心から感謝の気持ちを

伝えました。相手も「こちらこそありがとう」と笑顔で応えてくれました。

合同チームではなくなったため、もうお互いに「敵同士」という関係でしたが、私の、心からの感謝の気持ちを相手に伝えると、相手も最高の笑顔で応えてくれました。そのとき私は、「敵」や「味方」という枠を超えた、「温かい心のつながり」を感じ、感謝を言葉にして伝えることの大切さを強く感じました。

私たちは身近な仲間だけでなく、毎日家族や先生、友達、地域の人など自分を取り巻く多くの人に支えられて生きています。それは決して「当たり前」のことではなく、支えてくれる多くの人々がいるからこそ、私たちは喜びや希望に満ちた生活を送れるのだと思います。そういう人々に対する感謝の気持ちを忘れないことが大切です。

そして、「感 謝を忘れない」だけではなく、それ以上に大切なのが、私は、「感謝を言葉にすること」だと思います。感謝の気持ちを「言葉にする」ことで、温かい心の交流が図られ、より良い人間関係を築いていくことができると思います。

「明るい社会」―それはだれもがお互いに支えあったり、感謝しあったりしながら、温かな心の交流がは図れる地域、社会だと思います。

支えられていることを一人一人が自覚し、ささやかなことでも感謝を伝え合うことで、心のつながりを大切にしながら生きて行きたいと思います。